

## 教員養成型 PBL 教育における対話的事例シナリオの到達点 と課題

○森脇健夫 （三重大学）

○大日方真史 （三重大学）

### 1. 研究の目的と方法

教員養成教育において実践的指導力を身に着けることは焦眉の課題となっている。早期における現場への参入は多くの教員養成カリキュラムとして位置付けられている。だが、その現場は、「守られた現場」であり、初任期教師が実際に出会う問題のある現場とはかけ離れている。例えば「問題行動を起こす子ども」と持続的に対応しよりよい方向へ持っていくといったことは、学生の現場体験ではのぞむべくもない。

三重大学では1996年から医学部においてPBL教育を開始し、2007年から共通教育を含めて全学的に展開してきた。PBL教育の特徴として学生の能動的な学習を保障するシステム（学生にとって切実な問題の提示、小集団グループにおける協同的探求）の構築が挙げられる。医学部型PBL教育においては事例シナリオを原則的には用いるのに対し、教員養成型では、むしろ現場における問題解決を中核において展開されてきた。しかしながら上記のような状況（リアルな「現場状況」との乖離）を踏まえて「現場で出会うことは稀なケースだが、対応を誤ると深刻な問題を引き

起こす事例」について事例シナリオを作成する必要があるのではないかと考えるに至った。

### 2. 対話型事例シナリオの開発

ショーン(Donald A. Schön)が述べているように、教師の専門性は刻々と変化する状況との対話、そしてその中でよりベターな手を次々とうっていくことが求められる。問題解決過程に重心をおく医学部型事例シナリオに対し、教育現場では、問題の発見・同定に重心が置かれなければならない。私たちは、そうした体験ができるように「対話型事例シナリオ」を開発してきた。

その原理は、① 目的は正解に至ることではなく多角的に問題をとらえ、問題を確定すること② 専門家の知識（見識）に触れることは重要だが、それが「正解」ではない③ 対話型事例シナリオと学習者が対話することが重要である。

報告においては、1. 対話型事例シナリオの理論的歴史的整理 2. 開発された対話型事例シナリオの紹介 3. 対話型事例シナリオを用いた授業実践の到達点と課題、を扱う。Ref. Donald A. Schön, The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action 1983